



(東京オリンピック開く 朝日新聞 昭和39年10月10日)
「空前絶後といわれるベルリン大会を百点とすれば百十点はある。」と、田畑は組織委員会の大会運営を称賛した。



東京スイミングセンターで子どもたちを励ます田畑

ちょこっと豆知識

水泳とオリンピックに生涯を捧げた英雄

田畑にとって深い思い出があるロサンゼルスで2回目のオリンピックが開催された1984年、田畑は85歳となった。病床で閉会式まで見届け、閉幕後の8月25日、水泳とオリンピックにかけた生涯に幕を閉じた。葬儀には中曽根首相をはじめ多くのスポーツ関係者が弔問に訪れた。柩はオリンピック旗で包まれ、ペートーベンの「英雄」の楽曲が流された。



2019年大河ドラマ「いだてん」のもう一人の主人公 金栗四三(かなぐりしろう)と並ぶ姿が見られる貴重な写真。(左:田畑政治、右:金栗四三)

episode 7

スポーツ大国を目指す

田畑は東京オリンピック大会組織委員会の事務総長として、当時日本が優位に立っていた柔道と女子バレーボールをオリンピック競技に採用するよう強く訴えた。その結果、IOC委員であった嘉納治五郎が創設した柔道が正式種目となり、すべての階級でメダルを獲得。女子バレーボールも採用され、「東洋の魔女」と称された大松博文監督率いるチームは、期待通り金メダルを獲得した。一方、水泳に関しては古橋廣之進をはじめとする有力選手の引退後、世代交代

が進まず日本の競泳陣は惨敗。そこで田畑は日本水泳連盟名譽会長として、「水泳ニッポンの再建には、選手強化に使える屋内専用プールが必要だ」と主張し、1968年に東京スイミングセンターを設立。田畑は初代会長を務めた。東京スイミングセンターは現在に至るまで、日本最高レベルのクラブとして、指導者では、競泳日本代表ヘッドコーチの平井伯昌、選手では北島康介など多数のオリンピックを輩出し続けている。

episode 6

1964年、アジア初の東京オリンピック招致 ついに夢かなう!

前列右側から、田畑政治、東龍太郎(日本体育協会会長、JOC委員、第4~5代都知事)、二列目左側:フレッド・イサム・ワダ、三列目中央:古橋廣之進



田畑が中心となって立てた戦略に基づき、JOC会長の竹田恒徳や織田幹雄らは世界各国を回った。1964年のオリンピック開催地として東京支持を訴えたのだ。その中でもアメリカ在住の日系人フレッド・イサム・ワダは中南米など多くの国を献身的に回り、東京開催をアピールした。そして迎えたミュンヘンでのIOC総会。開催地として立候補したのは東京、テロロイト、ウィーン、ブリュッセルの4都市。日本のプレゼンターを務めたのはNHK解説委員の平沢和重だ。田畑をはじめとする代表団一同が固唾を呑んで見守る中、45分間の持ち時間に対して原稿も見ずに15分間の演説を行った。投票した58人のうち東京が34票を占め、悲願の東京オリンピック開催が実現したのだ。

CHECK! 田畑政治を支えた、強力な支援者たち

ヘルシンキ大会組織委員長・IOC委員 エリック・フレンケル
オリンピックを日本の再建に役立てるため、田畑と東に東京大会の招致を強く勧めた。

日本オリンピック委員会会長 竹田恒徳
ヨーロッパでは貴族が投票権をもっていたことから、元皇族という経歴を活かし、ヨーロッパ方面で東京招致活動に活躍した。竹田恒和(現JOC会長)の父である。

フレッド・イサム・ワダ
日系人で唯一の東京五輪準備招致委員。日本政府に代わり自費で欧州や中南米各国を訪問し、支持を取り付け、開催に大きく貢献した。

NHK解説委員 平沢和重
1959年にミュンヘンで開催されたIOC総会で、最終プレゼンターとして演説。嘉納治五郎の最期を船上で看取った人物として紹介され、東京招致の価値を訴えた。15分間の演説で委員たちの心を動かし、招致決め手の1つとなる。

日本初のIOC委員 嘉納治五郎
柔道の創始者で1940年の東京オリンピック招致に成功する開催を決めた帰りの船で亡くなる。

JOC総務主事 田畑政治

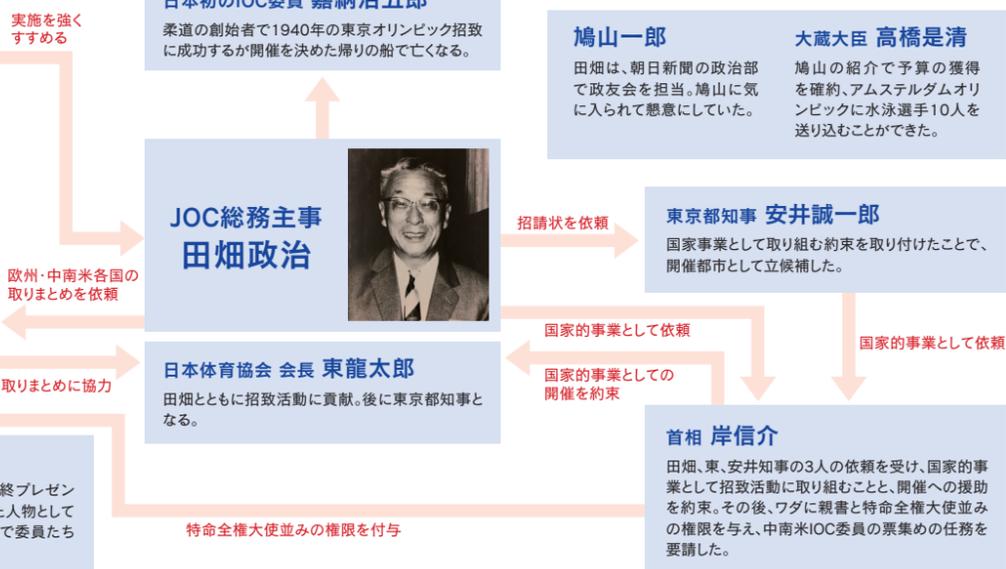
日本体育協会 会長 東龍太郎
田畑とともに招致活動に貢献。後に東京都知事となる。

首相 岸信介
田畑、東、安井知事の3人の依頼を受け、国家的事業として招致活動に取り組むこと、開催への援助を約束。その後、ワダに親書と特命全權大使並みの権限を与え、中南米IOC委員の集結の任務を要請した。

鳩山一郎
田畑は、朝日新聞の政治部で政友会を担当。鳩山に気に入られて懇意にしていた。

大蔵大臣 高橋是清
鳩山の紹介で予算の獲得を確約。アムステルダムオリンピックに水泳選手10人を送り込むことができた。

東京都知事 安井誠一郎
国家事業として取り組む約束を取り付けたことで、開催都市として立候補した。



田畑政治の経歴年表

1984年(昭和59年)	逝去
1983年(昭和58年)	日本体育協会名誉副会長
1980年(昭和55年)	昭和54年度 朝日賞受賞※長年にわたる日本水泳界への貢献とオリンピック運動推進の功績
1977年(昭和52年)	日本オリンピック委員会(JOC)名誉委員長 東京・札幌の両五輪開催に貢献したとしてIOCからオリンピック・オーダー銀章を受章
1973年(昭和48年)	日本オリンピック委員会(JOC)委員長 中国のIOC復帰に尽力
1971年(昭和46年)	日本体育協会副会長
1969年(昭和44年)	勲二等瑞宝賞※長年の水泳界への功績が認められ田畑は勲二等瑞宝章を受章
1966年(昭和41年)	ユニバーシアード東京大会組織委員会顧問 札幌オリンピック冬季大会組織委員会顧問
1965年(昭和40年)	日本水泳連盟名譽会長
1964年(昭和39年)	第18回東京オリンピック開催(日本競泳のメダル獲得数・銅1)
1963年(昭和38年)	東京オリンピック選手強化特別委員会委員
1961年(昭和36年)	第17回ローマオリンピック開催(日本競泳のメダル獲得数・銀3、銅2)
1960年(昭和35年)	東京オリンピック選手強化対策本部本部長 第17回ローマオリンピック開催(日本競泳のメダル獲得数・銀3、銅2)
1959年(昭和34年)	1964年の東京オリンピック開催決定 東京オリンピック大会組織委員会事務総長
1956年(昭和31年)	第16回メルボルンオリンピック 日本代表選手団団長(日本競泳のメダル獲得数・金1、銀4)
1955年(昭和30年)	第3回アジア競技大会組織委員会事務総長
1954年(昭和29年)	第2回アジア競技大会選手団団長
1952年(昭和27年)	日本体育協会専務理事 アジア競技連盟評議員 第15回ヘルシンキオリンピック 日本代表選手団団長(日本競泳のメダル獲得数・銀3)
1950年(昭和25年)	浜松市営元城プールで日米交歓水上大会を開催 ※元城プール完成記念として誘致
1949年(昭和24年)	日本水泳連盟が国際水泳連盟へ復帰 ロサンゼルス全米水上選手権大会に参加 朝日新聞社常務取締役
1948年(昭和23年)	日本水泳連盟会長 第14回ロンドンオリンピック開催日に日本選手権開催
1947年(昭和22年)	日本オリンピック委員会総務主事 朝日新聞東京本社代表
1946年(昭和21年)	日本体育協会常務理事
1945年(昭和20年)	日本水泳連盟理事長
1939年(昭和14年)	日本水上競技連盟理事長
1937年(昭和12年)	浜松第一中学校で日米水上競技大会を開催 ※母校の50mプール完成記念として誘致
1936年(昭和11年)	第11回(ベルリン)オリンピック本部役員(日本競泳のメダル獲得数・金4、銀2、銅5)
1932年(昭和7年)	第10回ロサンゼルスオリンピック水泳総監督(日本競泳のメダル獲得数・金5、銀5、銅2)
1931年(昭和6年)	第1回大会を実現し日本が勝利
1930年(昭和5年)	日米対抗水上競技大会を提案 神宮プールが竣工
1929年(昭和4年)	大日本体育協会専務理事
1924年(大正13年)	朝日新聞社に入社 大日本水上競技連盟の創立に参画 理事
1916年(大正5年)	日本水泳連盟の設立に関わる 静岡県浜名郡浜松町成子(現在の浜松市)に生まれる

